



かかりつけ医の支え

千葉市 塚谷敏雄さん

奥様と一緒に教会にて。
ご夫妻とも敬虔なクリスチャン。

「昨年、心筋梗塞から命を取り止めたのは、かかりつけ医の先生のお陰です」そう語る塚谷さんは、今年80歳。しかし、明朗闊達で若々しいその様子からは、とてもそんな大病をされたばかりの方には見えません。

ことの始まりは、一昨年受けた市の健康診断。心電図に軽度の異常ありとの結果が出たため、20年近くお世話になっているかかりつけ医を受診しました。

「先生は、『不整脈があるから、常時、この薬を手放さないようにして下さい』と、ニトロペン（狭心症などの心臓発作を抑える薬）を処方してくださいました。でも、その時はまさか本当にこの薬が必要になるとは…」

それから数カ月後の昨年6月の早朝。もやもやと息苦しいような不快感をおぼえた塚谷さんは、かかりつけ医の指示を思い出しニトロペンを服用しました。すると、ほどなくして症状は消えましたが、念のためにと、自宅からほど近い総合病院で診てもらうことに。そして内科を受診した途端、医師の表情がにわかに曇り、すぐさま循環器科へ。そこで専門医から「すぐに治療が必要なので、家族の方を呼んでください」と言われてしまいました。

「散歩が趣味の私は病院までのんきに歩いて行っていましたし、検査室に移動する時自分です歩いていこうとしたんです。そうしたら看

護師さんから、『冗談じゃない。今、歩いたら心臓の血管が破裂するかもしれないですよ』と言われビックリしました」と塚谷さん。病名は、心筋梗塞。心臓の冠動脈が詰まり危険な状態にあったため、その日のうちにステントグラフトという人工血管を入れるカテーテル治療を受け、一命を取り止めました。

「あの朝、もし薬が無くて発作を抑えられなかったら、私は多分、助かっていなかったそうです。治療していただいた総合病院の先生方から『命が助かったのは、かかりつけ医の先生が小さな異変を見逃さず、薬を処方しておいて下さったお陰ですよ。とても良いかかりつけ医をおもちですね』と言っていたかったです」

その後、順調に回復し、すっかりお元気になるられた塚谷さんは、毎日20分のウォーキングが日課。また、生来の歴史好きが講じ、生涯学習センターの情報誌に千葉の歴史のコラムを連載されているそうです。

「元気に好きなことをしていられるのは、体の隅々まで知っていて下さるかかりつけ医の存在があったから。身近なかかりつけ医の重要さと有難さを、あの時つくづく実感しました」

信頼するかかりつけ医に健康と心を支えられている塚谷さん。仲良しの奥様と共に、今後ますます充実した人生を謳歌していけることでしょう。

患者さんとお医者さんのひとこまストーリー募集!

◆投稿先: 〒260-0026 千葉市中央区千葉港 7-1 社団法人 千葉県医師会 広報課「ミレニアム」係/Eメール kouhou@office-cma.or.jp

◆文字数: 1,100 文字以内 (投稿用紙の様式は問いません) ◆プレゼント: 本誌掲載された方 図書カード